

Title	18世紀カタロニア語の接続法の形態
Author(s)	長谷川, 信弥
Citation	Estudios Hispánicos. 1999, 23, p. 53-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97940
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

18世紀カタロニア語の接続法の形態

長谷川 信弥

0. はじめに

カタロニア語史上、衰退期といわれる16世紀から18世紀(あるいは19世紀はじめ)に至るおよそ3世紀間は、ただ単に文学言語としてのカタロニア語がスペイン語(カスティリア語)に取って代わられただけでなく、政治的にもスペインというひとつの国家の枠組みのなかにカタロニアそのものが組み込まれていく過程で、国家語としてのスペイン語がこの地域の社会の様々な面に浸透していく時期でもある。特に18世紀初頭のスペイン継承戦争後、ブルボン王朝による中央集権主義的な政策によって、司法・行政面や教育面においてスペイン語が強要されることとなるが、このことがこの地域の言語問題の現在に至るまでの変遷に与えた影響は計り知れない。

また、こうした社会言語学的な興味と並行して、言語そのものを対象とする考察への興味も尽きず、たとえば1743年にカタロニア語初の文法書を著したJosep Ullastreに関する研究など、特に近年、この時期を対象とした研究が多くなされ、その成果が発表されている[Balsalobre(1995)]。

本稿ではまず、この18世紀の言語状況を簡単に概観し、次に言語学的考察のひとつとして、この時期にいくつかの形態が現れているとされる接続法現在¹⁾について、通時的な変遷のなかでこの時期の形態がどう位置づけられるのかを概観する。そのうえで、本稿の大きな目的のひとつとして、近年になってカタロニア図書館(Biblioteca de Catalunya)から公開されたいわゆるゴニマ文書(Fons Erasme de Gònima / Erasme de Janer)をとおして、この時期におけるカタロニア語の姿の一端を垣間見ることができればと思う。

1. 18世紀の言語状況

一般にカタロニア語の衰退(Decadència)または弱体(Decandiment)の期間といえは、19世紀前半の文芸復興(Renaixença)までをこの期間に含めている場合もあるが、このおよそ3世紀間を指していると考えてよい。なかで

も、18世紀初頭のハプスブルグ家からブルボン家への王家の移行、それにとともにスペイン継承戦争(1700-14年)は、カタロニアの歴史そのものの行方を決定づけたといえる。フェリペ5世によるいわゆる新国家基本令(els decrets de Nova Planta)²⁾によってスペイン語が公用語であるとされ、カタロニアへの司法、行政面での同言語の導入がすすめられることとなった。また、この時期は、スペイン語も衰退期と位置づけられており、その弱体化からの建て直しの意味も込めてスペイン王立アカデミアが設立され(1713年)、黄金世紀の興隆を復活させる意図に満ちていた。こうした状況の下、中央集権的な政策の導入によって、カタロニア語に対するこれまでにない厳しい言語政策がおこなわれることとなった。

具体的な政策をDuarte et al. (1984:109) は、「迫害の6つの兆候」として次のようにあげている：

- 1) スペイン語を唯一の公用語とすること。
- 2) カタロニアのすべての大学の閉鎖(リエイダ、バルセロナ、ジロナ、タラゴナ、トゥルトーザ、ビック)とセルベラ大学の設置(1717年)。
- 3) カタロニア語による暦やロマンセの印刷の禁止。
- 4) 初等教育におけるスペイン語での教育(カルロス3世, 1768年)。
- 5) スペイン語ではない演劇作品の上演の禁止(カルロス4世, 1799年)。
- 6) 学校でカタロニア語を話した生徒への罰の強要(1837年)。

個々の事例の検証と考察は機会をあらたにするが、司法・行政面でのスペイン語の使用の強要はのみならず、教育面での影響は大きいと考えられる。バルセロナは、大学の閉鎖によってこの地域での学問的な中心の地位を失うこととなる。また、18世紀末におけるカタロニア語での識字率は5%から10%であるといわれている。³⁾ しかしながら、このようにスペイン語の特に教育面への浸透は明らかではあるが、日常生活での使用言語は相変わらずカタロニア語が用いられ、個人の日記から通信文などでも、さらには公的な文書の一部もカタロニア語で作成されていたという。⁴⁾ これらは、たとえばその役人がスペイン語を知らない小さな村などでのことで、社会全体の公的な伝達手段としての言語の地位はスペイン語に譲られていたと考えられ、この時期にはほぼ完全なダイグロシアが達成されていたとされ

る。⁵⁾ さらに、スペイン語を教育する義務が生じたことによって、スペイン語の提起する問題がカタロニア語にどのように反映されるかを知る必要からカタロニア語自身についての研究も進められた。⁶⁾ なかでも注目すべきは、文法書が著されていくことであった。1743年、カタロニア語初の文法書を著した Josep Ullastre やそののち1797年の Joan Petit Aguilar や1815年の Josep Pau Ballot があげられる。

次節では、このような状況の下でのカタロニア語の実際の姿がどうであったかを複数の形態が共起してその通時的展開が議論されてきた接続法の形態について見ていくことにする。

2. 接続法現在形

ここではまず、Moll (1991:151) があげている表を参考にして、⁷⁾ カタロニア語史上これまでに現れた主な接続法現在形の表を見ながら考察する。

	[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]
第一変化動詞cantar						
CANTEM	cant	cante		canti	càntia	càntiga
CANTES	cants	cantes	cantos	cantis	cànties	càntigues
CANTET	cant	cante	canto	canti	càntia	càntiga
CANTEMUS	canthem					
CANTETIS	cantets	canteu				
CANTENT	canten		cànton	cantin	càntien	càntiguen
第二変化動詞batre						
BATTAM	bata			bati	bàtia	bàtiga
BATTAS	bates		batos	batis	bàties	bàtigues
BATTAT	bata		bato	bati	bàtis	bàtiga
BATTAMUS	batam			batem		batiguem
BATTATIS	batats	batau		bateu		batigueu
BATTANT	baten		bàton	batin	bàtien	bàtiguen

第三変化動詞 sentir

SENTIAM	sentia		senti	séntia	séntiga
SENTIAS	sentes	sentos	sentis	sénties	séntigues
SENTIAT	sentia	sentio	senti	séntia	séntiga
SENTIAMUS	sentam		sentim		sentigam sentiguem
SENTIATIS	sintats	sintau	sentiu		sentigau sentigueu
SENTIANT	senten	sénton	sentin	séntien	séntiguen

左の形態がラテン語の形態で、縦方向に見て、[4]の系列の形態 (canti, cantis....; bait, batis....; senti, sentis....) が、今日の接続法現在形である。ただし、第一変化動詞の1人称複数形は[1]の cantem, 2人称複数形は[2]の canteuである。⁸⁾

問題となるのは、[4]の系列における -i の出現である。これについての通時的な説明は、主に2つある。

まず、Moll (1991) や Badia i Margarit (1984) が説明する過程は次のとおりである。

[1] [2] [4]
 CANTEM > cant / cante > canti
 ① ② ③

ここでは、まず CANTEM から通常の音韻変化 ① によって -EM が脱落し、[1]の cant が生まれる。この[1]は、マジョルカ島方言にみられる形態で、この例の cantar であればこのままで成立するが、語尾が子音+流音の動詞の場合、音韻的に不安定な語尾に支えとなる母音 (vocal de suport) が付加されて②, compre や parle のようなバレンシア方言にみられる形態[2]が出る。次に強勢のない母音 e や a が閉母音化することにより、e が i となり③, バルセロナを中心とする東部方言での現在の形態[4]が得られるというものである。

次の説明は、Gulsoy (1976), Lleal (1992) や Ferrando et al. (1993) などで多少の違いはありながらも受け入れられているものである。それによると、[5]の形態があらわれるには2つの過程が設定される。

[5] [5] [5]

1) SAPIAM > sàpia → tròpia(tropia) → 第2、3 → 不規則変化
càpia ① 第1変化動詞 変化動詞 動詞

[5] [4]

2) arribia a cansar > arribi a cansar
②

まず、語尾に -IA- を有していた第2変化動詞となるラテン語 SABERE と CAPERE から出た形態で、不定詞はそれぞれ saber と caber (cabre) で中世に sàpia と càpia があり、この形態が[5]の第1変化動詞に類推され(①)、これが第2変化の規則変化動詞などすべての形態に拡がり、のちに近代になって不完全な発音、または弱化によって(②)、特に2)の動詞迂言形のような統語環境下で、頻出する前置詞 a に飲み込まれるかたちで現在のような[4]となったというものである。

前者の説明では、③の変化について、必ずしも e の弱化が i とはならないのでは、という点でやや疑問が残り、後者の説明では、他のすべての動詞に対する形態のもとになる sàpia と càpia が、現在では接続法現在で唯一不規則な語尾を持つ形態、すなわち[6]の系統の sàpiga と càpiga となって、他のすべての動詞と異なってしまうことへの説明が不足するように思われる。

そこで、前頁にある第3変化動詞のラテン語形にすでに -IA- が現れていることから、上述の後者の説明を修正して、この第3変化からの類推で第1変化や第2変化に -i(a) が現れたとするほうがより納得のできる説明となるのではないだろうか。これにはまた、直説法現在の形態で1人称から3人称の単数で語尾に -i が現れないことと関係づけることができると思う。つまり、直説法と接続法の語形を区別するために -i が唯一のものとして機能し、その他4つの母音がすべて現れる直説法現在形と対立して接続法現

在形がその形態的役割を果たしていると説明できる。そうすれば、*sàpiga* と *càpiga* のふたつに関しては、これだけが例外として残っていると考えることができるのではないだろうか。

直説法現在とともに、方言形式でも様々な形態の現れている接続法現在の形態に関する考察はこれだけでは十分ではなく、さらに考察が必要となろうが、ひとつの試みとして提案しておきたい。さて、上で見たような形態が18世紀にはどのような姿で現れているのかを次に見てゆきたい。

3. ゴニマ文書にみる接続法現在形

18世紀のカタロニア語の研究にとって資料体となるものは、衰退期ゆえに文学作品には乏しく、私的な文書、本稿で使用する商業通信文のほか、教会や公的機関の作成した文書などである。なかでも当時の社会一般の状況が綿密に描かれているものとして、マルダ男爵 (Rafael d'Amat i de Cortada, barò de Maldà) によって1769年から1816年にわたって書かれた日記である *Calaix de Sastre* があげられる。

本稿で使用するのは、カタロニア図書館に所蔵され、近年になって公開されたゴニマ文書 (*Fons Erasme de Gònima / Erasme de Janer*) である。これは、1783年以降の第2次バルセロナ紡績会社が各地の代理業者とおこなった通信書簡が収められているファイルで、カタロニアの毛織物業から綿業への転換期の状況が把握できる、社会経済史的にも貴重な資料である。⁹⁾ ここではその通信書簡のうち、会社側からカタロニア内の代理業者に宛てられ、かつカタロニア語で作成された書簡で、複製者によって信書控え帳 (*copiador*) に写し取られたものからに限り用例を採取した。書簡数は22通、年代は1783年から1790年にかけてであり、接続法現在の形態で現れている動詞の数は、第1変化動詞が32、*dir* も含めた第2変化動詞が20、第3変化動詞が11の計63動詞、採集例はのべ140例にのぼる。

3.1.

以下にまず、このファイルにあらわれた接続法現在形をとる動詞の不定詞をあげる。カッコ内は実際に現れたその形態である。ただし現在完了形

をつくる助動詞 *haver* の形態もこれに含めている。

第1 変化動詞

anar (*vagia*), *aumentar* (*aumentia*), *atrassar* (*atrassia*), *avisar* (*avisia*), *buscar* (*busquia*), *constar* (*constia*), *contemplar* (*contemplia*), *cuidar* (*cuidia*), *demanar* (*demania*), *donar* (*donia*), *encarregar* (*encarreguia*), *enviar* (*envie,envien*), *estar* (*estiguan,estiguias*), *estrñar* (*estrañian*), *fila[á]r* (*filia*), *guardar* (*guardia*), *incorporar* (*incorporia*), *indicar* (*indiquia*), *invigilar* (*invigilia*), *lograr* (*logri*), *obligar* (*obliguia*), *portar* (*portia*), *pregar* (*pregam*), *presentar* (*presentia*), *proc[q]urar* (*proc[q]uria*), *rehusar* (*rehusia*), *respectar* (*respectesca*), *retornar* (*retornia*), *senalar* (*señalia*), *terminar* (*terminia*), *tornar* (*tornia*), *trovar*[*trobar*] (*trovia*).

第2 変化動詞

aparèixer (*apareguia*), *comprendre* (*comprenguia*), *dependre* (*dependesca*), *deure* (*deguia*), *dir* (*diguia*), *extendre* (*extenguia*), *fer* (*fassia*, *facian*, *fassian*), *haver* (*hagia*, *hi hage*), *merèixer* (*meresca*), *ocórrer* (*ocorria*), *permetre(r)* (*permetia*), *poder* (*puguia*, *puguian*), *prendre* (*prenguan*), *rebre* (*rebia*), *remetre* (*remetia*), *saber* (*sapiam*), *satisfer* (*satisfacia*), *ser* (*sia*, *sian*), *veure* (*vegia*, *vegam*), *voler* (*vullan*).

第3 変化動詞

acudir (*acudia*, *acudian*), *cumplir* (*cumplin*), *detenir* (*detingua*), *prevenir* (*previnguia*), *repetir* (*repetesquia*), *seguir* (*seguesca*), *servir* (*serveasca*, *serveasca*), *subsistir* (*subsistesca*), *succeir* (*succehesca*), *tenir* (*tinga*, *tinguia*, *tinguian*), *venir* (*vinguia*).

これらの形態を見ると、前節にあげた表の[5]にあたる *-ia* を語尾として持つ形態が、特に第1、第2 変化動詞で優勢であることがわかる。特に第1 変化動詞では、現在の形態である *logri* と第3 変化動詞からの類推であると考えられる *respectesca* が例外的に見られるばかりである。第2 変化でも、*meresca* が現れている。また、*voler* は、[1]の形態である *vullan* を

有している。第2変化でも、-ia形が優勢であることがわかる。第3変化動詞の語尾に現れる -esca は、現在の -eixi に続くいわゆる起動相動詞の形態であるが、ここでも -ia形がよく見られる。全体として、ほぼ -ia形で占められていることを再度強調しておきたい。このことは、この時代に -ia が優勢になり始めるという Lleal (1992: 129) とも合致している。また、これは現代の接続法現在形への前段階としてとらえられる形態で、安定したかたちで出現していることも確認されることになる。

3.2

次にこれらの形態を採集例で見えていながら、接続法の用法を確認していきたい。¹⁰⁾

1) 従属節

a. 名詞節

名詞節で接続法が現れる場合、通信文の特徴として接続詞の *que* が省略されていると考えられる場合が多い。主節の動詞をみても、現代の動詞のなかで従属節で接続法を要求するものと変わりなく、大きな差異は認められない。

例文 (1) の *bastar* や (2) の *no creure* については説明を要しないであろう。接続法になっている動詞は、(1) では *sia* で不定詞は *ser* (あるいは *ésser*) であるが、現代の形態ならば *sigui* となり、*-gui* が挿入された形態に変わっている。この *sia* はあとで見る分配の表現では、現代でも用いられている。(2) の *hagia* は、現代ならば *hagi* となり、この *hagia* から変化したものであると想定される。

(1) *pues basta sia recomenat del Sor. Joan Bapta.*(29-5-1784)
(Joan Baptista氏からの推薦があれば十分なので)

(2) *...no crehem li hagia may escrit (que)...*(22-10-1785)
(彼に手紙を書いたことはないと思っっています)

このほか、この項で扱うべき主節の動詞は、*desitjar*, *dir*, *esperar*,

estimar, fer, no pensar, suplicar, volerなど、接続法を要求する典型的な動詞が採られた。注意の必要なesperarの場合をあげる。

(3), y esperarém nos vagia enviant lo filat(21-5-1785)

(我々に紡いだものを送っていつてくださるのを待つことにします)

esperar は、スペイン語と異なり、「待つ」の意なら接続法で、「期待」の意ならば直説法をとるが、ここでは前者の意で使用されているものと考えられる。anarの接続法現在の形態 vagia は、現代では vagi であり、上記の haver の場合と同様である。

また、いわゆる「ser +形容詞 + que」の従属節で接続法が現れている場合が次の(4)(5)(6)である。

(4) Desitjosos estos nous SSrs. Directors de qe. se augmentia

la filansa....

(30-10-1787)

(これら新しい幹部は紡績が増加するのを願っており)

(5)sera facil se extenguia més....(29-6-1784)

(さらに拡大するのは容易となるでしょう)

(6)es precis qe V.m. acudia sens falta dins quinse dias.....

(10-10-1789)

(貴殿が2週間以内に必ずお越しくくださることが必要です)

(4)の形容詞desitjósは、従属節として(de) que節をとっていて、今の綴りでは augmentar-se が接続法現在形となっている。(5)において、今の綴りで estendre's では、この種類に特徴の -gui- が現れている。また、接続詞 que が省略されることが多いなかで、(4)と同じく(6)では、q(u)e が用いられており、接続法が用いられる統語環境にも現代のカタロニア語のそれと大きな差異はないと考えられる。

b. 副詞節

接続法が出現しやすい統語環境のひとつが副詞節であるが、今回見たな

かでも接続法が現代の用法と差異なく使用されている。

目的をあらわす副詞句は, a fi que, perque (peraque) が使われていて接続法を導いている点は現代の用法と同じである。また, a fi que では, スペイン語 (a fin de que) のような de を必要とする規則はない。(7) に現れる sapiam は, 前節で扱った中世から続く形態で, 現代では sapiguem となるであろう。

(7)a fi qe. sapiam qe.(15-4-1786)

(...と当方が知るために)

(8)perque no estrañian sa tardansa.(16-4-1785)

(その遅れを不思議に思われないよう)

(9)peraque se filia,....(5-11-1783)

(紡がれるように)

時を表す quan も使用されている。次の (10) の vullan は, voler の接続法現在の形態(3人称複数)であるが, -ll- が硬口蓋音なので -ian の -i がこれに飲み込まれていると考えられる。しかし, 現代の形態は, vulguin となり, sapiam の例と同様 -gui- が挿入される。ただし, この voler は, 現代の形態では直説法現在1人称単数形にのみ -ll- が残り vull である。時を表す副詞句は, これ以外に fins que (...するまで), mentras (mentre)(...する間), sempre que (する時はいつも), 例 (11) の una vegada que (一度...すると)などが使われている。

(10)...., quan no vullan adaptarse als limits....(23-4-1785)

(制限に適合しそうになれば)

(11)...., direm que una vegada que pr medi de Vm logria esta

Compa. lo fi que desitja,...

(20-3-1784)

(当社が望んでいることを貴殿をとおして得ることになれば)

譲歩を表す *encara que* も使われている。(12) で、現代は *pagant-ne* と綴られる現在分詞が現れているが、これを名詞句として使用することは非文的であり、この例文での使用もそのようなものと考えられる。

- (12)*encara que sia pagantne alguna cosa mes,....*(16-4-1785)
(たとえそれに対してさらに何かを支払うとしても)

その他、様態を表す *de manera que* (...するように)、否定の *sens que* (...せずに) も現れている。特に後者の例 (14) は、接続法現在完了形が現れている少ない例 (*hagia entregat*) である。この形態も *haver* の接続法現在と過去分詞とで作られる点は現代の形態と同じである。

- (13)*fent de manera qe. no se portia absolutament cotò inferior à las mostrás...*
(20-7-1785)
(見本より劣る綿を絶対に持ち込むことのないようにして)

- (14) *Acaba de arribar en est Magatsem una partida de cotó filát de eixa facturaria sens que per ara se nos hagia entregat carta que lo acompanya, ni nota de son pés,....* (26-6-1785)
(当倉庫に工場より紡績糸の荷が到着したばかりですが、それには今のところ、同封されているはずの手紙も、重量についてのメモも当方には渡されていません)

c. 関係節

関係代名詞そのものの使用については現代の用法との差異があるものの、節内の動詞の法選択においての差異はないと思われる。例文 (15) において、現代の綴りで *trobar* は、今回の見たなかでは総じて *trovar* で *-v-* となっている。(16) の *lo que* は、スペイン語の影響で用いられているのである。(17) では、*qui* (...する人) が先行詞を内包した関係代名詞として、(18) では *tot quant* (...するすべてのもの) が同様に用いられている。

- (15) ...*las disposicions qe. Vm. trovia per convenient,* (28-2-1786)

(貴殿が適切であるとみなすような措置)

- (16)podra Vm dirnos lo que li apareguia per resoldrer lo
convenient. (15-11-1783)
(貴殿が解決するに適切であると思われることを我々にお知らせく
ださい)
- (17)en varios Pobles se lamenta la pobre gent de faltarlos qui
cuidia donarlo treball; (30-10-1787)
(いくつもの村で可哀想な人々が自分たちに仕事を世話してくれよ
うとする人がいないことを嘆いている)
- (18)ab la advertencia que tot quant en avant li demania deurá
ser á costa sua.... (29-10-1785)
(この先そちらに注文するものはすべてそちらの費用によるもので
なければならぬと警告して)

2) 独立文

a. 命令の表現

本来的には、間接命令形や否定命令で現れる接続法現在の形態を扱うべきであるが、資料の性格上現れにくいと考えられるので、独立文での現れた命令形も見ることとする。(19) は que に導かれた従属節でのいわゆる間接命令の例である。これはqueの前方に主節の動詞となるものが見あたらないためそう判断できよう。(20) は独立文であり、3人称単数であるために接続法現在形が用いられているため、ここでとりあげる。

- (19), que busquia feyna per altre part,....(20-11-1784)
(別に仕事を探していただくよう)

- (20) Contemplia Vm. mateix los adelantaments de eixa
Facturia,.... (27-5-1786)
(貴殿自身がその工場の進捗状況をよく見ていてください)

b. 分配の表現

先に述べたように、ser の現代の接続法現在形は、sigui の系統であるが、分配の表現ではこの時期に一般に見られる sia を用いられることがある。

- (21)sia lo un ô sia lo altre lo portador....(28-2-1786)
(持参人がだれであっても....)

3.3

接続法の用法についてまとめると、現代のそれと特に目立った差異は認められず、安定しているといえる。接続法が要求される従属節での出現や命令形も分配の表現などいわゆる定型文においても現代の用法と異なることはなく、大きな議論の対象とはなりにくいと考えられる。ただ、本文書では、いわゆる商業通信文としては接続法過去の出現が大変少ないことを特徴としてあげることができよう。それは、現代の一般的な通信文では、主節に直説法過去未来を使い、その結果として従属節で必然的に接続法過去が現れることが多くなるという特徴に対立するからである。その理由として考えられるのは、かなり熟知した相手との通信であることから、より婉曲的な表現となる直説法過去未来を主節で使う必要が少なかったためではないかということである。

4. 最後に

今回は紙幅の関係で、採取したなかから検討を要するすべての例をあげることではできなかったが、いわゆる衰退期にあった18世紀のカタロニア語においては、比較的安定して接続法の形態が保たれ、用法についても現代のそれと大きく違わないことが確認でき、この時代の言語状況の一端を垣間見ることができた。また、その形態については現代のそれに至る次の過程が待っていて、検討の必要があるので、機会を改めて取りあげることにする。このように、接続法という一面だけを見れば、「衰退」や「弱体」という言葉の再検討を要するのではないかと、との印象を抱くかもしれない。しかし、今回観察した文書を見てみると、たとえば語彙やその綴りについては、一見してこれとは反対の印象を抱かざるをえないほどの特徴を呈している。つまり、スペイン語の語彙が借用され、文章中にそのままの形態

で用いられていて、この言語の影響力の大きさを認識することが容易なのである。この状況は今世紀後半のフランコ体制以後、あるいは今日に至るまでも多かれ少なかれ続いていくもので、観察の興味が湧くところである。幸いにも、この文書ではスペイン語を日常とする取引相手に宛て、スペイン語で書かれた通信も多く残されていて、両者の比較が可能であるため、今後さらにこの面でも調査をしてゆきたい。

注：

- 1) 法、時制などの文法用語については、田澤 (1991) に準ずる。
- 2) 各地方への布告は、1707年にアラゴンとバレンシア、1716年にカタロニアである。
- 3) Joan, Bernat et al. (1994), p.137.
- 4) Lleal (1992), p.119.
- 5) Martí i Castell (1992), p.27.
- 6) Carbuja (1993), p.52.
- 7) Moll (1991) では、-ir 型を第2変化、-er(-re) 型を第3変化としているが、この表では、田澤 (1991) に従って書き改めた。
- 8) これらの形態は、バルセロナを中心とした東部方言の標準的な形である。この地域での1人称複数と2人称複数を除く残りの人称・数の接続法現在形最終母音は、規則的な形態に収束しており、saber と caber の2動詞がわずかに不規則な形態を有している。また、この表における [1] から [6] の形態は通時的な順ではない。
- 9) 社会経済史的意義などこの文書の詳細については、Okuno (en premsa) を参照のこと。今回は、この文書の内容には触れず、文献学的な考察のみをおこなう条件で、データ化をおこなった早稲田大学大学院商学研究科博士後期課程の奥野良知氏より提供されたデータベースを使用させていただいている。
- 10) 各例において、カッコ内はその例文の採取された通信文の日時を表わし、例えば、(29-5-1784) は1784年5月29日付の通信文であることを示す。

参考文献

- Badia i Margarit, Antoni M. (1984) Gramàtica històrica catalana. 2a. ed. TRES i QUATRE.
- Balsalobre, Pep et. al. (ed.) (1995) La llengua catalana al segle XVIII. Quaderns Crema.
- Carbuja, Lluís et al. (1993) Història de la llengua catalana. 3a. ed. Columna Ed.
- Duarte, Carles i Massip, M. Àngels (1984) Síntesi d'història de la llengua catalana. Ed. de la Magrana.
- Espadaler, A.M. (1993), Història de la literatura catalana. Ed. Barcanova.
- Ferrando, Antoni et al. (1993) Panorama d'història de la llengua. Tàndem ed.
- Gulsoy, J. (1976) «El desenvolupament de les formes del subjuntiu present en català», Actes del tercer col. loqui internacional de llengua i literatura catalanes. The Dolphin Book.

- Joan, Bernat et al. (1994) *Història de la llengua catalana*. Ed. Oikos-tau.
- Lleal, Coloma (1992) *Breu història de la llengua catalana*. Ed. Barcanova.
- Martí i Castell, Joan (1981) *El català medieval. La llengua de Ramon Llull*. Ed. Indesinenter.
- (1992) *L'ús social de la llengua catalana*. Ed. Barcanova.
- Moll, Francesc de B. (1991) *Gramàtica històrica catalana*. Univ. de València.
- Okuno, Yoshitomo (en premsa) «Entre la llana i el cotó. Una nota sobre l'extensió de la indústria de cotó als pobles el darrer quart del segle XVIII». *Recerques*.
- 田澤耕 (1991) *カタルーニャ語文法入門*. 大学書林。

*本稿は、1998年10月4日、大阪外国語大学でおこなわれた関西スペイン語学研究会月例会での発表をもとに作成した。席上、様々なアドバイスをいただいた諸先生方に感謝します。また、ゴニマ文書を提供していただき、研究発表の際、また本稿作成時に数多くの示唆と教示を与えていただいたの奥野良知氏にはこの場を借りて御礼申し上げます。なお、いただいたデータの処理に関する一切の責任は筆者にある。

